

改訂コアカリ実務実習における薬局・病院・大学の連携トライアル・リフレクションペーパー”自己評価シート”の連携ツールとしての有用性と課題-

○青森 達^{1,2}, 鈴木 小夜¹, 高木 彰紀¹, 岩田 紘樹^{1,3}, 望月 眞弓^{1,2}, 山浦 克典^{1,3}, 中村 智徳¹ (慶應大薬,²慶應大病院薬,³慶應大薬局)

【目的】平成31年度より始まる改訂薬学教育モデルコア・カリキュラムによる実務実習では、「病院、薬局は実習施設間で実習生の実習した内容やその評価等を共有することで、重複する目標の指導を分担」することが求められる。

慶應義塾大学薬学部ではこの連携のトライアルとして、実習生が第Ⅰ期実習後に作成した「実務実習 自己評価シート (以下、自己評価)」を第Ⅱ期実習開始前に施設に提供し、薬局-病院-大学間の連携ツールとしての有用性を検討した。

【方法】本研究は慶應義塾大学薬学部附属薬局 (以下、附属薬局) および慶應義塾大学病院 (以下、慶應病院) において実施した。平成 28 年度第Ⅰ期に附属薬局、第Ⅱ期に慶應病院で実習した 2 名、同じく第Ⅰ期に慶應病院、第Ⅱ期に附属薬局で実習した 2 名の計 4 名に第Ⅰ期終了後に自己評価を作成させ、これを大学から第Ⅱ期実習開始前に各施設に提供した。

自己評価は本学において実務実習終了後に全実習生に通常課しているものであり、記載事項は「薬剤師としての心構え」、「コミュニケーション能力」、「服薬指導・処方提案」などの薬学部卒業時に必要とされる資質について、習得度の総括的な振り返りと第Ⅱ期実習に向けてのそれぞれの改善点である。

【結果・考察】各施設における第Ⅰ期実習での学びを実習生自身がどのように評価したか、また第Ⅱ期実習にどのように取り組むかを大学が把握することができた。また学生の自己評価結果を第Ⅱ期実習開始前に各実習施設に提供することが可能であった。今後、両施設の指導薬剤師に対して情報提供に関するアンケート調査を実施し、自己評価の連携ツールとしての有用性および今後の課題、より効果的な情報共有の方法について考察する。